

聞名仏教

第117号
(発行日)

2020年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉8月は休み
毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月18日午後6時30分始

身の事実に帰る

大分県宇佐市の藤谷知道
師から『御遠忌法話集』と
いうご本を送っていただき
ました。その中に現在ご活
躍の諸師の法話がいくつも
載せられていました。
このご本の中で、大谷派
の法話によく出て来る言葉
がいくつもあり、今回はそ
れについて書いてみました。
それらの言葉とは、

「南無阿弥陀仏は私を呼び覚
ます法の声です。思いが破
られ、思い以前の事実に帰
れとの喚び声です」
「身は思いを超えて運ばれ
ている」
「身の事実、これだけがあ
なたが帰っていく大地です」
「身の事実に帰る」
「事実を事実のままに受け
とめていく」
「自分の身を引き受ける、
死ぬことを引き受ける」
などと云う言葉です。

私が二十代半ばに東本願
寺の研修部に勤めていた頃
は同朋会運動が大変盛んで
して、本山の同朋会館には
多くのご門徒が泊まりがけ
で聞法に来ておられました。
その時に研修を指導してお
られた先生方はこういう言
葉をしばしば用いて指導さ
れ、それが大谷派の真宗教
化の特徴でもありました。
こうした言葉はそれまでの
伝統の宗学(教学)からの
お話(お説教)では語られ
てきませんでしたので、そ
こに新鮮味と意味深いもの
を感じたのでしよう、熱心
な若い大谷派の住職方の間
ではこういう言葉がはやっ
ていました。

私も影響を受けた一人だ
ったと思います。ただ、今
はそれらの言葉を少し検討
したいと思います。
それは、ここでいわれる
「身の事実」とは一体何か

何かと問うてみると、案外
ぼやっとしていることに気
が付きまします。何か意味深い
ということが感じられます
が、それが一体何を示して
いるのかよく分からない。
おそらく多くの聞法者がそ
う感じるのではないかと思
います。

たとえば、十人の人に「あ
なたは(身の事実)」と聞い
てどう受け取りますか」と
お尋ねしたら、おそらくい
ろいろな感想なり意見が出
ると思います。

以前、自坊で哲学者の西
田幾多郎博士の歌、
「わが心深き底あり
喜も憂の波も
とどかじと思ふ」
を出して、数人の方に「こ
の歌で(心の深き底)とは
どういう底ですか」とお聞
きしましたところ、それぞ
れ違った感想を話されたこ
とがありました。この歌の
場合、「心の底」が何が分

からなければ、この歌の意
味は分かりませんが、お
尋ねしたのですが、答えは
まちまちでした。

ですから「思い以前の身
の事実とは何ですか」と、
この話を聞いた人に尋ねて
確かめないとウヤムヤなま
まに終わりがねません。

しかし、これは聴聞して
いる人だけの問題ではあり
ません。そういう法話をす
るお方が「思いを超えた身
の事実」ということをでき
るだけ明らかに説かないと
聞いている人には分かりづ
らいともいえます。

大体「身の事実」という
言葉で一般的に考えられる
ことはたくさんありますの
で、ここでいわれる「身の
事実」とは何を示している
のかはすぐには分かりづら
いです。

たとえば、今、空腹を感
じている人が「現在の身の
事実を云いなさい」と云わ
れて「今、空腹です」と応
えたからと云って間違いと
は云えないでしょう。ある
いは新型コロナの影響で、

収入が減ってしまったっている人が、「今、実際お金に困っています」と云ったとしても誤りとは云えません。

今空腹だという身の事実はそれこそその人が「空腹と思おうと思まいと、やはり身の事実は空腹」なのでしょう。それは「思い以前の身の事実」といえます。

ですから、空腹を感じている人が「身の事実に帰る」とか「身の事実を引き受ける」と聞くと、今空腹な事実を空腹であると確認し、空腹という事実を「仕方ない」と受け入れることと理解するでしょう。

あるいは、新型コロナで経済的に苦しくなっている現在を「これが現実なのだ、どうあがいてみても仕方がない」と開き直ることが「身の事実を引き受ける」というだと受け取っても無理ではありません。確かに一種の覚悟ができたわけですから、そこにながしかの落ち着きがありましょう。こういうことを「身の事実に帰る」と了解しても不思議ではありません。

これをもう少し厳しい出来事についていえば、病院で検査をしたらステージ4の末期ガンだと知らされた時、「事実を事実のままに受けとめる」とか「自分の身を引き受ける、死ぬことを引き受ける」と聞くと、末期ガンになったことを「ガンは末期で直る見込みがない。生まれた者は必ず死ぬのだからそれは仕方がないことだ」と諦観することだと、そのように理解しても不思議ではありません。また、そのように受け取ることが真宗の信心だと理解してしまわないともかぎりません。

しかし、もしそれだけのことなら、本願も念仏もアミダ仏の救いも必要はありません。また特に仏教を聞かなくても、そのように受け取る人は当然いると思います。

ですから真宗の法話として「思いを超えた身の事実に帰る」という話はどういうことを云おうとしているのか。そこをよく聞かなければ、この言葉はいろいろ

に解釈される余地がありませんし、誤解もありましょう。そこで、これをどう理解するかというところで、先ほどの西田幾多郎博士の歌を手がかりにして話を進めたいと思います。

「わが心深き底あり 喜も憂の波も とどかじと思ふ」といいますが、結論から言いますとここで「深き底」というのが本当の「身の事実」「思い以前の事実」といえます。

そして私たちがふだん「事実」とか「現実」といつているものは、この歌では「喜びや憂いの波」であって、動きづめ変わりづめの現象といえます。現在空腹であるという事実は食事にありつけば満腹にも腹八分目にもなりましょう。あるいは現在収入が減って困っているという事実も縁が来ればなんとかやりくりしたとか儲かったということにもなるでしょう。あるいは現在、病気でもまた回復することもあり得ましょうか

ら、私たちが普通言っている「身の事実」は縁によって変わりどうしと言えます。そういうことで、私たちの日頃思っている「身の事実」とは一般的には、変化しつつある中での出来事としての事実です。

ただその変化に対して自分の都合で受け取って「都合の良いこと」といえば収入が増えるとか健康になるとかを喜び、「都合の悪いこと」といえば減収とか病気などが起こると苦しみます。だからこうした「身の事実に帰る」という時に、どう説かれるかという時、「自分の都合の良い悪しを離れない」「損得、良し悪しという自分の都合中心のモノサシを捨てて今的事实を受け入れよ」などというお説教にもなったりします。

ところが西田博士が「深き底」といわれる「身の事実」は、そうした流動的な今の現象を云うのではありませんし、それをどう受け止めるかの話ではありません。人生は、自分にとって

都合の良いことや悪いことの大小の波がくりかえし起こってきますが、波の底の海底（大地）はそれらによって動くことなく離れることもなく、こうした海水の波の動きにもかかわらず厳然として常に存在するように、私たちの心の底、深き底には私たちの一切の思いや悲喜苦楽の感情や計らいを超えて、大いなるいのちの働きがまします。私の存在（身心）をして存在たらしめている大いなる事実、いわゆるいのちの働きがましまして、私たちはこの働きを離れて一瞬も存在し得ない、そういう大いなるあたたかい実在がまします。これを西田博士は「深き底」と言われるのでありましょう。真宗では無量寿如来（アミダ）といえます。このはかりなきいのちのアミダに帰ることが「身の事実に帰る」ことでありましょう。

ですから「心の深き底」というのは、私たちの心の中ではありません。たとえ

【住職雑感】

昨年十月末、私の数少ない親友であり同学の友であった千賀雅夫君が亡くなった。彼は「朋友会」という真宗教学を学ぶグループの牽引力となった人であった。私よりも年下であったが、大きなリスクを抱えていた身だったので残念ながら先立ってしまい朋友会も解散。彼が力を尽くした「朋友」誌も廃刊となってしまった。あれから半年以上になるが友を失う寂しさを痛感する。

かなり以前、彼の寺を訪ねた時、私がクラシックに興味があることを知っていたからであろう、音楽を聴かせるというので、彼の部屋でCDを聴かせてくれた。何を聴かせてくれるのかと聞いていたら、モーツアルトのピアノ協奏曲二十三番だった。彼はモーツアルトを非常に愛していたので私に聴かせたかったのであろう。実際この曲の第二楽章は濃厚な哀愁を帯びて非常に美しく、一度聞いたら心に焼き付いて離れない。この曲を聴かそうとした彼の気持ちが伝わってきたのだった。又ある時「一緒に中国に旅をしないか」と誘ったら「行かない。中国はチベット佛教徒を弾圧している」といった。私はそういうことは余り気にせず中国旅行をしたが、正義感が強く潔癖なそういう彼は私は尊敬し好きだった。彼はチベット佛教徒への金銭的援助をしていただけでなく、寄付行為に金銭を惜しまない偉いところがあった。

無阿弥陀仏のお念仏の声です。南無阿弥陀仏の「南無」は「汝の力では助からぬのだ、そのままなりで我にまかせよ」との如来の仰せであり、南無阿弥陀仏の「阿弥陀仏」は「汝を摂めとつて捨てない、タスケル」の仰せであり働き（願力）であります。

この南無阿弥陀仏の喚びかけによつて、我が力や思慮では助からず、助けて下さるのは如来様ばかりということが知らされて、「ナムアミダブツ」と阿弥陀仏に我が身を引き渡さざるをえなくなります。そこに、おのずからアミダ如来に帰せしめられていくのです。それが「思い以前の身の事実に帰る」ことになるので

す。それはたとえば、ステージ4の末期のガンになった時、南無阿弥陀仏を聞くところに「ああ、如来様がまします、私のまことのいのちとなつてまします。私は死なない」ということがほのかに知られるのであります。それは不安や苦しみが

い。自我)の側から「アミダに帰る」いわゆる「身の事実に帰る」ということはできないのです。「帰る」という言葉は簡単ですが、自我の私から「帰る」ことは不可能なことなのです。

宗教の救いとか覚りとか、なかなか分からないというのは要するにこの壁があるからです。ところがこの限界の壁が分からずに、いつまでも自分の力や計らいで身の事実に帰ることができるようになり、如来に帰ることができるようになるに思つていつまでも自分の能力をたのみに行っているといつまでももうろうしかねません。

ところが、そういう人間能力の限界を如来はすでに知つて下さつていて、如来ご自身の方から私に働きかけ喚びかけて下さっているのです。この喚びかけを聞くところに、如来の大悲が知られ如来の大悲の仰せに身をゆだねることによつて自然に如来に帰ることができるのです。

この如来の喚びかけが南

ば足の底という場合、足の裏と理解することも可能でしょうが、足がついている大地(床)であります。譬えていう足の裏は私たちの心の中の底、足の底の大地は心の外の底です。床は足ではありません。しかし床(大地)がなくては人は立つことも座することも転ぶことも寝ることもできません。床(大地)があつて身体が存在し得るように、はかりのないのち大地があつて、私の存在が成り立っているのであり、それは私の心の中ではありません。身も心もその全体がそこに於て存在することのできる広大な場所であります。

それで西田博士は、心の波である悲喜の思いがいかに揺れ動こうとも、深き底があつて、それは悲喜の波が届かない心の底の有難い実在の働きであると詠われたのでありましょう。

さてここで先ほど「はかりなきいのアミダに帰ることが身の事実に帰ることだ」と申しましたが、実は私(思

耆婆月光ねんごろに

(和讃問答)

耆婆月光ねんごろに

是旃陀羅とはじしめて

不宜住此と奏してぞ

闍王の逆心いさめける

(観経和讃)

*

現代語訳 (月光大臣は耆婆大臣とともに、ねんごろに「王が今母を殺すようなことがあれば、それは王族の家柄を汚す行為であって、旃陀羅のするようなことでは、もしそういうことをするのなら、もはやこの城に居るべきではない」と阿闍世王が母親を殺そうとする悪逆の心をいさめた。)

N 「闍王 (アジャセ) が母親のイダイケを殺そうとした時、大臣の耆婆と月光がアジャセをいさめ、それによってアジャセはイダイケを殺害することを留まった、と云われているが、その大臣のいさめた内容が (是旃陀羅) と (不宜住此) なのですね」

D 「ええそうです。ただ、こういういさめの言葉には階級的な差別意識が月光にもアジャセ王にもあったといわれています」

N 「といたしますと」

D 「強固な階層的身分制社会であったインドでは僧侶階級が一番上、王族は二番目であり、旃陀羅は最下層に属し、人間扱いがされないような差別された人たちでした。そんな中で、人をいさめるのに (あなたのこととは旃陀羅のようないだ) と云ったので、高貴な王族の身分であると誇っているアジャセにとっては非常に侮蔑的なショックな言葉でした。このような言葉で相手をいさめることはいさめる方にも差別的な人間観を持つていたから出た言葉であり、それを聞いてショックを受ける側も当然差別意識があったから身にこたえたのでしょう」

N 「こういう差別的な発言を

して相手をいさめた月光や耆婆は仏教徒だったのですか」

D 「直接いさめたのはどうやら月光大臣のようです。それは観経に (ときに一人の臣あり、名を月光という。聡明にして多智なり。および耆婆と王のために礼をなしてもうさく) とあって直接いさめたのは月光だったようです。月光は仏教徒でなくバラモン教徒だった可能性があります。バラモン教は階層的な上下を肯定していましたから。ただ耆婆は仏教徒でした」

N 「アジャセは王族として当然自分は貴い身分だという差別意識を持っていたので、そういう方が効果的だったのかもしれませんね」

D 「ええそうです。けれどもこういう言葉は人間に対する差別的な見方を維持し、強めはしても無くしていくことにはなりませんから、正しい浄らかな言葉ではないですね」

N 「宗祖は、どうしてこういう差別発言とも言える内容にふれるご和讃を作成されたのですか」

D 「これらの一連のご和讃は

観経に説かれている王宮の事件を事象のままに和讃にされたのであって、無論それを誉めているわけではありません。事件の事象なり歴史的な事象をそのまま和讃にされたのです。そういう和讃はいくつかあります」

N 「お釈迦様は人間は平等であると説かれたことはよく知られています。それでも観経というお経にはそういう差別発言とも言える言葉も出てくるのですね」

D 「ええそうです。これは釈尊の当時、起こった事件をとりあげて、それを縁として釈尊がイダイケに説法をされたのが観経です。観経が説かれることになった背景としての事件を説かれたところでの経典作者の言葉です。当然これが釈尊の教えようとする内容ではありません」

N 「月光とともにアジャセをいさめた耆婆は仏教徒だったといわれていますが、耆婆には差別意識はなかったのですか」

D 「ないとは言えません。これは在俗の熱心な仏教信者でした。けれども悟りを開いた聖者ではありませんから、煩

悩が当然あったと思います。煩惱があるということは人間を平等に見るような智見が十分身につけていたとはいえません。当時の階層差別の強いインド社会の考えの影響をやはり受けていたとしても不思議ではありません」

N 「仏教の教えを聴いて差別意識は簡単にはなくならないのでしょうか」

D 「そうですね。それは現代の私たちも同じです。仏教の教えを熱心に聞いていても人を差別意識で見るといふ煩惱はこびりついていきます。ですから聖者ではなく煩惱具足の凡夫と言われるのです。ただそういう差別意識は浅ましい心であり罪であることを仏教の教えによって知らせていただき自覚させていたで、この差別心を慚愧し、この心に引きずられて差別的な言動をしないように、また人間を平等に見る見方に変わるように心がけることは少しずつでもできましよう。それが仏教の教えを生涯かけて聞いていく生活でもあります」